

令和6年度 第3回青少年育成委員会 会議録

- 1 日 時 令和7年2月16日（日）午後2時～午後5時
- 2 会 場 豊田市青少年センター 会議室 A
- 3 出席者 委員／大村恵（委員長）、斉藤茂美（副委員長）、佐藤義則、福田猛、田浦武英、守随純子、
尾園正輝、野畑清敬
オブザーバー／杉山基明（副理事長）、藤本聡（専務理事）、
事務局／猿谷直記（青少年部長）
青少年センター 荘田元宣（所長）、松浦友洋（副所長）
総合野外センター 山中浩之（所長）、山村聡志（副所長）
産業文化センター 永坂正和（所長）、中根史義（副所長）、水野路子（係長）
- 4 内容 産業文化センター中根の司会により、以下のとおり進行した。

（1）会の成立

委員8名中7名の出席を得て、委員会規則第6条第1項に基づき、委員会の成立を報告した（1名は、後ほど遅れて出席）。

（2）主催者あいさつ

杉山副理事長があいさつをした。

これ以降、大村委員長が議事を進行した。

（3）議事

- ①議題1 令和6年度 モニタリング事業評価（後期分）について
事務局が資料に基づいて説明。

若者未来塾（若者・外国人未来応援事業）について、事業評価の説明があった。

（モニター：委員）

- ・社会的に意義の高い先駆的な事業に取り組んでいると評価できる。
- ・学習支援は、ほぼ1対1の対応でスタッフとの信頼関係も感じられた。
- ・定員の設定は実態に合わせて設定すべきである。
- ・参加者が多い日のスタッフの対応が課題である。
- ・小学生、中学生への学習支援は小学校区、中学校区で実施することが望ましい。地域学校共働本部において実施を検討することを、市および教育委員会に提案してほしい。
- ・中学校卒業後の学習支援が必要な学習者のために、ケースに応じて送迎支援を検討してほしい。交

流館にサテライト会場を開設することも検討してほしい。

- ・上記のためにも、3月頃に周知を兼ねた外国ルーツの生徒及び定時制、通信制高校進学希望者等へのニーズ調査を中学校に対して行うことを検討してほしい。

若者未来塾（若者・外国人未来応援事業）について、以下のような質問と意見があった。

（委員）

もう少しスタッフが充実しているとよかった。また、兄弟、姉妹の参加者や特に外国にルーツの参加者に送迎の支援はできないか。あるいは交流館などでサテライト会場を開設できないか。

（事務局）

送迎支援については、今すぐには難しいところがあるが、ZOOMでの対応は行っている。

（委員）

ZOOMでの支援は何名いるのか。

（事務局）

現状、ZOOMでの支援はいないが環境は整っている。もう少しPRしながら参加の難しい方への対応をしていきたい。

（委員）

いきなりのZOOMではハードルが高い印象である。関係性を構築していればいいがZOOMでの対応ができることを周知してもらうことは大切であるが、対面での関係性も大事にしていきたい。

種まき事業「オリジナルマグカップ作り&本格コーヒー体験」について、事業評価の説明があった。

（モニター：委員）

- ・気楽に参加できる内容ではあるが、それが今後の青少年センター利用へつながるかどうかは、関連イベントの企画や誘致ができるかで、ねらいが達成されるのではないか。
- ・調理室の設備上、適正な参加人数であった。

種まき事業「オリジナルマグカップ作り&本格コーヒー体験」について、以下のような質問と意見があった。

（委員）

次の利用につながるような企画、誘致ができるとねらいが達成できるのではないか。

（事務局）

この種まき事業は3回シリーズ。PRをする中で、10月に開催した企画に参加した大学生が、同じ大学の学生と共に、別の事業に参加をしていただいた例がある。やはり雰囲気によければ次も参加してもらえるとという手ごたえがあったので、引き続きつながりを意識した参加し易い企画を立案していきたい。

（委員）

担当者所感にて、「17人中4人が外国にルーツのある方が参加」とあるが、どのような経緯でこの企画を知ったのか。

(事務局)

産業文化センターの建物内には TIA があり、そこからの参加である。

(委員)

高校生が参加していてよかったとの評価があったが、18 歳をこえていたから参加できたのか。

(事務局)

募集を途中から高校生も参加可能とした。

(委員)

最初から高校生以上でもよかったのでは。

(事務局)

この企画は、担当者が内容を決めて対象年齢を決めている。今後も内容に応じて対象を決めていきたい。

活動支援事業「学生×プロ コラボお笑いフェス」について、事業評価の説明があった。

(モニター：委員)

- ・サロンに多くの人が集い、ちょうど人数的にもよかったのではないかな。
- ・運営スタッフは、主に大学生によって自主的に運営されており評価できた。
- ・今回は芸人を中心とした企画であったが、他のバンドなどの企画でも同じ様なことができたのではないかな。但し、場所を変更することにもなる。

活動支援事業「学生×プロ コラボお笑いフェス」について、以下のような質問と意見があった。

(委員)

事業費は 100 万円以上である。費用対効果の検証はしているのか。

(事務局)

検証はしていない。

(委員)

予算からプロの芸人を選んだのか。

(事務局)

今回、依頼した「じゅんいちダビッドソン」氏は愛知県にゆかりのある芸人である。関西出身であるが、大学が愛知県であった。調べていく中で生涯学習、社会福祉の分野に興味があり、また、講演の経験もある。現在は個人事務所を立ち上げてキャリアを積んでいる一方で、若いアスリートを応援して、スポンサーとして提供もしている。そのような経歴から選定させてもらった。学生とのコミュニケーションを大切にいただける方を選定した。

(委員)

共催事業となっているが、市費で行われたのか。市の方でも評価がされると思うので後日、費用対効果も含めて報告していただきたい。

(委員)

高校生は豊田大谷高校写真部が参加しているが、小学生、中学生の参加はどうなっていたか。

(事務局)

お客さん(来場者)として親子での参加はあった。舞台の裏方としては高校生、大学生が中心に支援してくれた。

(委員)

中学生なら関心のある子もいると感じるが、中学生へのPRは行ったか。

(事務局)

中学校まで出向いてのPR活動はしていない。「広報とよた」やホームページでのPRは行った。

(委員)

キャリア教育から考えると中学生から、プロの芸人と触れ合う機会があるといい。今後は中学生も参加できるような仕組みがあるとよい。

(委員)

集客面のマネージメントはどうであったか。口コミや人とのつながりも大切である。せっかくなので産業文化センターの多目的ホールや小ホールでの開催でもよかったのではないか。

(事務局)

この活動支援事業の目的として1階サロンで活動することが挙げられている。

(委員)

じゅんいちダビッドソン氏のインスタグラムに載せてもらうとか、キャンプ芸人の顔もある中で、総合野外センターと一緒に企画するとかあると面白い。

(事務局)

実際にじゅんいちダビッドソン氏のSNSで開催前後にアップしていただいた。

若者によるまちづくり提案事業 WAKATTE「アウトドア就活」について、事業評価の説明があった。

(モニター：委員)

- ・個人間での会話やコミュニケーションはあまりみられなかった。
- ・企業側にとって学生たちの話を聞く機会としてだけではなく、聞く姿勢、協調性、行動力を判断する機会をより多く得ることができるが、それを十分に発揮できていたような学生を見ることはできなかった。
- ・「新たな感覚の就職説明会」と捉えるのであれば、今後も何らかの形で開催することが良いと感じる。運営方法や集客など事前準備を学生主体で、より周到に行うことで今回以上の学びの機会につながり、受け継がれる事業となり得るのではないか。
- ・学生側は「お客さん」という姿勢を持たず、のびのびとしたリラックス感を出し、企業側はおおらかな思いで彼らの様々な一面を観てもらう事が必要。
- ・主催者は、目指すべき具体的なイベントのゴールをもっと考え、動いて、沢山汗をかくとよい。
- ・イベントの経験が少ない学生には、事前ミーティングにアウトドアコーディネーターなどが同席し、サポートしてもよかった。

若者によるまちづくり提案事業 WAKATTE「アウトドア就活」について、以下のような質問と意見があった。

(委員)

予算において市費負担が 69 万円、採択金額が 32 万円となっているがどのような内訳なのか。

(事務局)

69 万円は「若者によるまちづくり提案事業」全体の予算、この事業の採択団体「ニューバイブス」に採択された金額が 32 万である。この他にもう一つ採択された団体へ 18 万円を採択している。

残りの 19 万円は PR 活動費等で使用している。

(委員)

この事業は、手を挙げた団体に対して採択をしておこなう事業なのか。

(事務局)

そのとおりである。

(委員)

そうであれば、アドバイザーがいると本来やりたいことができないのではないのか。時には失敗も必要ではないのか。

(委員)

そのとおりで失敗も必要である。しかし、就活イベントであることを考えると、企業の参加、学生もお金を出し合って参加する企画で、失敗は最小限に収めることも必要である。小さな失敗を重ねながら学生のステップアップになればいいと感じる。

(委員)

事業後にはふりかえりの時間を設けたか。

(事務局)

ふりかえりは事務局と学生で行った。この企画は、参加者が集まらなくて苦労した。PR の部分が足りなく開催 1 週間前までは、参加者は 1 桁であった。正直、学生の甘えもうかがえ、ギリギリのところでも事務局がアドバイスをを行い、そこで気づきを得てもらった。

(委員)

この事業の目的は「アウトドア就活」なのか「学生の経験を積むこと」なのかどちらであるか。

(事務局)

「アウトドア就活」は学生たちが最終的に出した答えであり、事務局としては若者が豊田市のまちづくりの企画を考えていく中で、彼らが社会参加をすることが一番の目的としている。

今回は、就活による企業とのマッチングまでは検証していない。

(委員)

団体としての目的と事業の目的の二重制がある事業である。何年生が参加したのか。

(事務局)

高専の学生もいたが、基本的には大学 1 年生から 3 年生までが参加しており、就活を始める前の参加者であった。企画を立案した「ニューバイブス」も就活前の学生の参加を望んでいた。

サークル・グループ文化祭について、事業評価の説明があった。

(モニター：委員)

- ・ 青少年センターを利用する団体が実行委員会を編成し自主的に運営がなされている。

- ・それぞれの団体の特徴を生かした活動成果の発表の場となっている。
- ・市内の高校、大学に呼びかけて参加を促しており PR に繋がっている。

(モニター：委員)

- ・もっと来場者を多く集めるにはどうしたらいいか検討する必要がある。

サークル・グループ文化祭について、以下のような質問と意見があった。

(委員)

PR はどのように行ったか。

(事務局)

出演するサークル・グループ、団体のみなさんにチラシやチラシのデータを渡し、ご自身での PR をお願いした。事務局ではメインターゲットである高校、大学への PR を行った。特に市内の高校には直接電話をしたり、訪問してチラシを配架させてもらった。

(委員)

やはりここでも中学生への PR がないが、中学生へ PR することにより次の高校生の参加を促すことに繋がるような働きかけをしてもらいたい。中学生にとっても進路を考える上で、高校生がどんな活動をしているのかを知ることはとてもいいことである。

(委員)

自身も参加させていただいた。とても取り組みやすい環境を整えてくれた。事業のねらいに「団体が協力し」とあるが、今年はいじめてコラボ（バンド&ダンス）をおこない、「すごくよかった」との声も聞いた。ただし、文化祭に参加する実行委員の会議に、参加するグループが少なく協力体制がないように思えた。従ってバンドとの調整も難航した。

来年度からは、必ず実行委員会の会議に参加しなければならなくなったことはよかった。しかし、高校生が会議に参加することは難しいとも感じている。

(委員)

高校生では会議への参加は難しいと思われるが、社会性を育てていく上では大事な機会である。

出席しないと参加できないのではなく、育てる方向で参加を促してほしい。

(委員)

参加団体人数と来場者はどのくらいであったか。

(事務局)

合計では延べ 1,350 名の参加があった。会場については、午前中の小ホールの開始時点では観客が少なく、今後の課題である。午後は観客も多く賑わった。

(委員)

ウォークラリーに参加した子どもたちを見ていると、各ブースまでは足を運んでくれるのだが、体験や参加までは行っていなかった。そこで体験したら答えを教えて貰えるとよかった。

(事務局)

今回は、各ブースに足を運んでもらうことを目的とした。

野外活動体験会 ふらっと六所山について、事業評価の説明があった。

(モニター：委員)

- ・親子ともども自然の中で様々な活動をとおして、小さい時から自然と触れあえるプログラムは見ていてほっこりとした。
- ・集団行動ではなく、家族単位で自由に活動できる内容であった。
- ・クラフトの難易度が高い。
- ・説明時、聞き取りやすい音量にする。

野外活動体験会 ふらっと六所山について、以下のような質問と意見があった。

(委員)

参加者数はどれくらいか。また、申込み制であったのか。申込者の中で指導者はいたのか。

(事務局)

50名ほどの申込みがあった。申込者は指導者というよりは家族、グループでの参加であった。詳細については後日、調べてお伝えする。

(委員)

団体への呼びかけはどうしたのか。ボーイスカウトやガールスカウトは、こういった場には参加していないと思うが。

(委員)

参加した子どもたちに対しては、むしろ大学生のカウンセラーよりもボーイスカウトやガールスカウトの同じ年代同士の方が親しみ易いのではないかと感じたので、声掛けしてほしいと思った。

昔は、よくこういった事業へも参加をしていた。

(委員)

子ども会やこども園からの参加はどうであったか。

(事務局)

保育士さんの個人での参加は見られた。

(委員)

学校やこども園のプログラムに取り入れていただくためにも、関係している方が参加されることはいいことであり、団体（学校やこども園）にもPRしてほしいかった。

(委員)

以前は、子ども会が六所山へ行く機会が多かったが、現状はどうか。

(事務局)

子ども会の数も減少しており、イベントごととして遠方へ連れていく機会も減少傾向にある。

(委員)

市子連としてお答えすると、10年前では400強の子ども会が存在していたが、現在は200台である。今は子ども会に入会していない子どもも多い。

今までは前年踏襲で六所山に行っていれば次年度も行くということになっていたが、コロナ禍になり状況がかわった。

(委員)

1年ごとの役員が交代していくと、活動が断絶されていく傾向にある。コロナ禍の中でそういった経験をもっている保護者がいなくなっている。子ども会の会議を六所山で行うのはどうか。

(委員)

子ども会の役員に限らず PTA の役員をやりたがらない保護者も多くなっている。

(委員)

保護者もコロナ禍により社会的な活動に触れなかった数年間も大きかった。意図的に外へ連れ出すきっかけが大事である。

今後、六所山に集まる機会も検討いただき、今回の「ふらっと六所山」とタイアップすることもいいと感じる。

(委員)

コロナ禍以前は小学 5 年生を対象に「年少リーダー研修会」をおこなっていたが、ようやく開催できるようになってきた。子ども会の育成者が何をやっていいのか分からないこともあるので市子連でも PR していきたい。

(委員)

このような事業は、団体との連携が必要で大事なことである。

親子自然体験塾②「冬山きちキャンプ」について、事業評価の説明があった。

(モニター：委員)

- ・家族ごとに一部屋が割り当てられているので参加しやすい。
- ・ほおのきホールでのリース作りで 9 家族はゆとりある設定である。
- ・事業のねらいの中に、子どもに対するねらい、大人に対するねらいが考えられるといい。
- ・各家族に担当者が割り当てられているが、実習生がいなければスタッフを増やす必要となる。
- ・「きち」の骨組みは子どもには難しい。子どもの参加は絵を描くことだけなのは残念。
- ・公共性からも参加費がやや高い印象であり、検討が必要である。
- ・家族利用の可能性を広げるためにはこうした取組は重要であるが、内容については研究の必要がある。

親子自然体験塾②「冬山きちキャンプ」について、以下のような質問と意見があった。

(委員)

参加費についてはどうか。

(事務局)

募集をした段階で一律 3 千円という形で実施した。1 日目の夕食代、2 日目の朝食代、2 日目の炊出しの材料費、宿泊のシート代でほぼ 2 千円となる。その他として、リース代やテントでの基地づくりの材料費が千円である。

参加者が確定した段階で、小さなお子さんがある家庭においては全て連絡をとり、食事やリースづくりが必要であるかを確認した。実際には 2 千円で参加をしている家族もあった。

(委員)

学校でのキャンプ活動が減少しているとお聞きしている。色んな形で中学生が参加できる工夫が必要ではないかと感じる。こういった家族キャンプもその1つではないかと思う。中学生が活躍できるキャンプを進めていただきたい。

豊田高専ワークショップ「AI プログラミング入門」について、事業評価の説明があった。

(モニター：委員)

- ・講師の用意してくれたプログラムづくりの例に工夫を加える参加者もいて、思考力や想像力を身につける事業であった。
- ・パワーポイントでの解説の中の漢字にルビが振ってあり、小学4年生から6年生の参加者への配慮が感じられた。
- ・講話をうなずきながら聞き、プログラム作成も集中して行う参加者の姿が見られ意欲的に参加できる事業であった。
- ・保護者の関心も高く、別のワークショップに参加を希望する家庭の増加が見込まれる。
- ・一般のプログラム教室と比べ、家計にやさしい参加費の設定である。
- ・2020年にプログラミング学習が学校教育にも導入され、プログラミング思考が探究的な活動に生かされることがねらいとされており、時代に適した事業である。

(モニター：委員)

- ・プログラムのレベルを上げて、導入編、応用編、発展編などの対応を展開していく必要がある。
- ・学校教育でもプログラミングを取り入れた授業を行っていると聞いたが、自宅でのパソコンの有無や環境の違いで学習の格差が懸念される。

豊田高専ワークショップ「AI プログラミング入門」について、以下のような質問と意見があった。

(委員)

評価書の中の質問について説明をお願いしたい。

(事務局)

「無断欠席の対応についてはどうしているのか」であるが、特に次回以降の申込みを外すなどの処置はしていない。

「Wi-Fiを使用したワークショップであり、使用料についての費用はどうしているのか」の質問については、科学体験館のインターネット使用料に含まれており、参加費からの徴収ではない。

「科学体験館の利用は天候に左右されるのか」については、天候による影響は大きく、雨天時は混み合う傾向にある。祝日も多い印象である。駐車場は産業文化センターの他の施設の催しにも影響され満車となることもある。満車情報は共有している。

「講師謝礼について」は、他のワークショップとの兼ね合いも見えて決めている。ただし、昨今の物価高騰の流れもあるので、一度、市の基準も見ながら再検討する時期にきていると感じている。

今回の内容は入門編であったが、必要に応じて段階を設けてもいいかということは検討してもよいと思っている。

(委員)

入門編であったが、子どものレベルはどうであったか。

(事務局)

応募条件として Windows ができることとしている。

(委員)

学校では Windows の操作は何年生から行っているのか。

(委員)

今は小学 1 年生からタブレットでアプリを使用している。4 年生の算数でプログラムを組む授業が始まるので、4 年生からの募集でいいと思う。タブレットの入っているものは「スクラッチ」というアプリであるが、ウェブ上での「ストレッチ」を使用して拡張したところがよかった。

(委員)

4 年生であれば誰でも参加できたということか。

(委員)

お馴染みのソフトなので大丈夫である。ただし、「ストレッチ」などは戸惑う子もいるかもしれないが、スタッフがサポートしていたので皆成功していてよかった。

(委員)

野畑委員の評価の中に「チームビルディングのツールとしても応用できるのでは」とあるがどうか。テーブルに 1 つ大きなモニターを設置して行うということか。

(委員)

そうである。子どもたちも力の差もあり、いろいろな表現方法がある中でうまくできたら面白いのではないかと思った。

(委員)

講師と打ち合わせをして、プログラムを練り上げていけば可能かと思う。

(委員)

子どもたち個々の能力を上げるイベントはよくあるが、チームで何かを達成する事業がもう少しあっていいような気がする。

みんなでサイエンスショー①回してあそぼうについて、事業評価の説明があった。

(モニター：委員)

- ・通常のサイエンスショーの観客数は、60 名から 70 名ほど。今回の事業への参加は、20 名ほどで若干少ない参加であったが、プラネタリウムの上映時間との兼ね合い、限られた空間、道具の中ではちょうどよい参加人数であった。
- ・参加人数が多い場合の工夫が必要である。
- ・体験学習を通しての成果は認められた。
- ・アンケートから始まったよい企画。毎回実施してもよい。

みんなでサイエンスショー①回してあそぼうについて、以下のような質問と意見があった。

(委員)

今回の「①回してあそぼう」と、「②静電気で遊ぼう」の 2 回の体験があった。通年のサイエンス

ショーごとの内容の中に、このような体験があるといいと思う。

(事務局)

実際にもっと実施してほしいとの声もあり、回数を増やしたいとは思っているが、このクオリティーを維持したまま、サイエンスショーのテーマで実施するのは簡単な話ではない。人員配置や他の事業との兼ね合いもある。

この事業はまず今年度初の試みとしてスタートしたものであり、継続していくことでノウハウを磨き、実施回数を徐々に増やしていきたい。また、事業という形式にかかわらず、人気の高い体験は、サイエンスショー後に体験できる時間をとるなど調整をしていきたい。

(委員)

科学体験館では現在、企画展で「独楽を楽しもう」が開催されている。ここで遊んでいる子も沢山いた。このように企画物にして、例えば「静電気くらげ」とかを実施すれば、いつ来館しても体験できるのではないかと思った。やはり、見ている人もいるので難しいのか。

(事務局)

リソースの問題がある。この事業自体がサイエンスショーの後にもう少しつっこんで体験したいという声を汲み取った内容から、人員を配置したところに着眼を置きたい。

②議題2 令和7年度 青少年部事業計画(案)について

事務局が資料に基づいて説明。

議題2について、以下のような質問と意見があった。

(委員)

豊田市博物館が今年度オープンし頑張っている。とよた科学体験館も頑張っていたきたい。

(事務局)

正式にお伝えすることはできないが、次年度では博物館とのコラボ事業の計画も進んでいる。

(委員)

7ページに記載の総合野外センター「アドベンチャーin 六所」の補足として、中日文化センターとの連携事業があるが、講師にアドベンチャーレーサー「田中陽希」氏とある。実際、田中陽希氏は現在、アドベンチャーレーサーからは離れており、今回は「田中正人」氏に変更させていただいた。

田中正人氏は最近ではテレビ番組「クレイジージャーニー」とかにも出演している。彼とは知り合いであり今回紹介させていただいた。日程は10月12日、13日の予定である。

(委員)

基本方針について、SDG'sやCFCIの取組を意識した事業は大切である。CFCIに取り組んでいる東京都町田市の施設の状況を聞くと、利用者の声を聞く機会、企画や運営に参加することが進んでいる。是非それぞれの施設でも、どのように利用者が参加できるのかを検討していただきたい。

また、中学生の段階において部活動の地域移行が進んでいる。それに対して3施設はどのように答えていくのか、何らかのメッセージがあるといい。

総合野外センターで高校生ボランティアが活躍することは非常にいいことであるが、そこへ中学生も野外活動ができるような、学校を横断するような全市的な部活動を構想してもいいかと思う。

科学体験館でも部活動を学校に対して提案していくアプローチが必要であり、中学校の部活動を支える取組を検討していただきたい。

(4) その他

①令和7年度 第1回青少年育成委員会の日程について

別紙、候補日より調整を図り、次の日程で決定した。

期日／令和7年5月11日（日）午前10時

会場／青少年センター

内容／令和6年度事業報告・令和7年度事業視察など

②施設からの諸連絡

（事務局）

前回の議事録について、発言の主旨など異なる場合は事務局へ連絡いただきたい。また、前回の質問にあった「財団ホームページのアクセス数」については、直近1週間では370件、1日に換算すると50件程度のアクセス数があることを報告する。

以上